日常的記憶の検索に及ぼす感情の効果

——検索手がかりの自己関係性について——

青森中央短期大学 川 瀬 隆 千

Influence of affect on everyday memory: Self-reference of retrieval cue

Takayuki Kawase (*Aomori Chuo Junior College, Yokouchi-Kanda, Aomori 030-01*)

There have been two views as to mood congruent recall: The one interprets it as an automatic process, while the other explains that it appears only when self-referent information processing is running. In this study, one experiment was conducted in order to examine these two opposing views. By false feedback of task performance, positive or negative mood had been induced in each subject, who was given two "cue" words, and asked to retrieve everyday events. The result was that mood congruent recall occurred when the word "self" was presented as a cue; but no effect of mood with neutral cues. This result supports the hypothesis that mood congruent recall is found only when self-referent information is processed. However, such effect was not evident in positive mood condition. In positive mood condition, there remains a possibility that mood congruent recall may be an automatic process. The effects of mood on memory were discussed from various viewpoints.

Key words: affect, mood congruent recall, self-referent information, retrieval process.

記憶の再生が感情によって歪められることは多くの研究で指摘されている (Blaney, 1986; Isen, 1984; Isen, Shaker, Clark, & Karp, 1978; Nasby & Yando, 1982; Natale & Hantas, 1982; Snyder & White, 1982; Teasdale & Fogarty, 1979).

感情が記憶の再生過程に及ぼす影響は、従来“ムード一致性効果 (mood congruent effect)”で説明されてきた (Blaney, 1986). われわれは悲しいと悲しいことを思い出し、楽しいと楽しいことを思い出すということを日常的に経験しているが、ムード一致性効果のモデル(以下、ムード一致性モデルと呼ぶ)にしたがえば、このように現在の感情状態と一致した感情的トーン (affective tone) を持った情報が再生されやすいのは、感情が情報の検索手がかりとして働いたためであると仮定される。つまり、感情は感情的に一致した情報のアクセスビリティ (accessibility) を高める (Anderson, 1983; Bower, 1981) のである。具体的には、うれしい、楽しいといった感情的にポジティブな状態である時には、うれしかったこと、楽しかったことなどのポジティブな内容の記憶が再生されやすく、逆に、悲しい、落ち込んだといった感情的にネガティブな状態の時には、悲しかったこと、落ち込んだことなどのネガティブな内容の記憶が再生されやすい。記憶の再生過程に見られるこのような現象をここでは“ムード一致再生効果”と呼ぶ。

情報の符号化過程についても、ムード一致性モデルでは、感情に一致した情報の符号化が促進されると仮定される。つまり、ポジティブな感情状態では、ポジティブな情報が符号化されやすく、ネガティブな感情状態では、ネガティブな情報が符号化されやすい (Forgas, Burnham, & Trimboli, 1988; Nasby & Yando, 1982; Forgas & Bower, 1987).

感情が記憶過程に及ぼす影響については、状態依存学習効果による説明 (Bower, 1981; Leight & Ellis, 1981; Forgas et al., 1988, Bartlett, Burleson & Santrock, 1982) も試みられてきた。状態依存学習効果とは、ある状態で学習した事象が同じ状態で思い出されやすいことを言う。このモデルでは、感情は情報処理の“感情的な手がかり”を提供するものと仮定されているが、状態依存学習効果は無意味な記憶材料を用いた場合にしか認められないこと (Leight & Ellis, 1981) や、学習時の感情と再生時の感情の一致だけでは認められず、学習時における干渉 (interference; 再生されるべき記憶材料とは別の記憶材料を、同時に、異なる感情状態で学習しておくこと) を含むような実験手続きにおいてしか認められない (Bower, 1981; Blaney, 1986) など、モデルの限界が指摘されている。

一方、ムード一致性モデルでは、感情は情報処理の“意味的な手がかり”を提供するものと仮定されている

(Medigan & Bollenbach, 1982). 情報処理は意味的な文脈に基づいて行なわれるので、情報処理に及ぼす感情の効果はムード一致性モデルによってよりよく説明される。

しかし、ムード一致性モデルについても大きく2つの問題が指摘されている (Blaney, 1986; 川瀬, 1990). 第1に、感情は事象の符号化には大きな影響を及ぼすが、検索や再生にはあまり影響しないという点である。ムード一致性モデルは事象の符号化については比較的よく当てはまるが、検索や再生の過程には必ずしも当てはまらない。第2に、記憶に及ぼすポジティブ感情とネガティブ感情の非対称性という点である。ムード一致性モデルは、ポジティブ感情に関しては比較的よく当てはまるが、ネガティブ感情には当てはまらないことが多い。

第1の問題点は、検索手がかりとしての感情の効果に関する点である。一般に、記憶検索は外的手がかりの提示 (記憶再生のための教示や検索手がかり語の提示) によって促進される。これに対し、感情は記憶検索のための内的手がかりを提供するものであり、その効果は外的手がかりに比べてかなり弱い。したがって、外的手がかりの存在によって、その効果は失われてしまうであろう。感情が検索や再生の過程にあまり影響しないのは、このような理由によると思われる。しかし、このことは逆に、感情以外に有効な検索手がかりが存在しない条件や検索される事象があいまいで明確な検索手がかりが欠如している条件では、記憶検索に感情の効果が認められることを示唆する。

この点について、Schwarz & Clore (1988) は評価・判断される事象があいまいで、事象について全体的な判断を求められている時には、評価・判断が感情の方向に歪められるが、具体的な事象について具体的な判断を求められる時には、感情の影響が認められないと述べている。彼らは、感情は事象の評価・判断のためのヒューリスティックスとして働くとし、ムード一致性を仮定する必要はないと述べている。しかし、彼らのモデルは、感情が事象の評価・判断過程に及ぼす効果に限定されており、記憶検索過程に及ぼす効果を検討することはできない。

これに対し、ムード一致性モデルでは、感情が記憶検索を歪め、その結果、事象の評価・判断に感情的な歪みが生じるとしている (Forgas & Bower, 1987; Forgas & Maylon, 1987). つまり、評価・判断過程は記憶検索過程の結果として説明できる。そして、もし、感情以外の有効な検索手がかりがない場合や検索される事象があいまいな場合に限り、感情が記憶検索を歪めるのであれば、Schwarz & Clore の仮説はムード一致性モデルで説明可能であろう。

第2の点については、最近、自己関係的な情報を処理

する場合にのみ、感情に一致した事象の再生が促進されるという指摘がなされている (Kuiper & Derry, 1982; Pyszczynski, Hamilton, Herring, & Greenberg, 1989). Pyszczynski et al. (1989) は、抑鬱を慢性的なネガティブ感情状態ととらえ、2つの実験を行なっている。その第1実験では、抑鬱的な傾向を持つ被験者とノーマルな被験者に、自己注目 (self-focus) を高めるような操作が行なわれ、その状態の下で日常的な記憶の再生が行なわれた。実験の結果、抑鬱的な傾向を持ち、自己注目が高められた被験者はネガティブな内容の記憶を多く再生した。抑鬱的な傾向を持っていても、自己注目を高められなかった被験者はネガティブな記憶をあまり再生しなかった。また、第2実験では、抑鬱傾向を持ち、自己注目が高められている被験者に自己に関する情報の再生を求めた時にのみ、ネガティブな情報が多く再生されたが、同じ条件の被験者でも、他者についての記憶の再生を求めた時にはネガティブな情報はあまり再生されなかった。このような結果は、自己に関係する情報の処理 (具体的には、自己注目の高まりや自己をターゲットとした記憶の再生など) を行なっている条件下でのみ、ネガティブ感情に一致した情報の再生が促進されることを示している。同様な結果は、Kuiper & Derry (1982) によっても報告されている。彼らは、抑鬱的な傾向を持つ人々が抑鬱に関係する形容詞を多く再生することを見いだした。ただし、この結果は被験者が事前にそれらの形容詞の自己記述性についての判断を行なっていた条件でのみ起こったのである。つまり、自己関係的な情報の処理 (自己記述性の判断) が行なわれている場合にのみ、感情と一致した情報がよく再生されたのである。

上に述べた2つの問題点から、ムード一致再生は“自己”という“あいまいな事象”についての情報処理 (自己関係的な情報の処理) を行なっている場合にのみ認められる現象であると考えることができる。

しかし、このような仮説にも問題点が指摘される。ムード一致性モデルは本来、感情が記憶再生に及ぼす効果を“自動的な”ものと仮定している (Fiske & Taylor, 1984; Clark & Isen, 1982). したがって、ムード一致再生が自己関係的な情報の処理を行なっている場合にのみ認められるとすることは“自動性”を否定することになる。

本研究ではムード一致再生効果と自己関係的な情報処理との関係を検討する。具体的には、感情を生起している被験者に記憶再生を促進するような手がかりを提示し、その手がかりから自由に事象を再生することを求める。手がかりは抽象的であいまいな単語を2つ提示するが、1つは自己関係的な情報処理を促進させる手がかり (“自分”という単語) とし、もう一方は自己関係的な情報処理には無関係の手がかり (感情的にニュートラルな

Table 1
Manipulation check: Subjects' mood state after
false feedback and retrieval task

After feedback			
Question 1: 今の気分はどうですか	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>
Positive condition	5.20	0.98	6.61***
Negative condition	3.30	0.78	
Question 2: 不安や緊張を感じていますか。 ^{a)}			
Positive condition	2.90	1.48	2.75**
Negative condition	4.25	1.55	
After retrieval task			
Question 3: 実験中、気分はどうでしたか	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>t</i>
Positive condition	4.75	1.22	2.52*
Negative condition	3.85	0.96	
Question 4: 現在の気分はどうですか			
Positive condition	4.95	1.16	2.50*
Negative condition	4.00	1.18	

Notes: ^{a)} Higher score indicates negative affect.

*** $p < .005$, ** $p < .01$, * $p < .025$.

単語)とする。“自分”という単語の提示により自己への注目が喚起され、自己に関係した情報処理が促進されると期待される。一方、ニュートラル語にはそのような効果は期待できない。ムード一致再生効果が自己関係的な情報の処理と関係しているならば、“自分”という手がかりを提示された場合にのみ、感情と一致した情報が再生されるであろう。

方 法

被験者 男女大学生 37 名がランダムにポジティブ感情条件、ネガティブ感情条件に分けられた。ポジティブ感情条件は 18 名、ネガティブ感情条件は 19 名であった。

感情生起の方法 本実験では、感情生起の方法として“偽りの課題成績フィードバック”の方法を用いた。被験者には実験の目的を、“人間の社会的適応性や課題達成傾向、および、一般的記憶傾向を調べる新しい検査をつくるための基礎的な資料とするものである”と説明した。そこでまず、社会的適応性と課題達成傾向に関するテストを行なう旨教示し、同時に、このテストは現在開発中であるが、既に 500 人以上が受けており、テスト結果はそれなりに信頼できるものであると教示した。被験者には、パーソナリティテスト様のテスト、知能検査様のテストなどを含む一連の“偽り課題”を行なわせ、実験者がその得点をパソコンにインプットすると、被験者の得点とともに、その偏差値、全体の平均点がグラフ表示される。このフィードバックはまったく根拠の

ないものであり、ポジティブ感情条件の被験者にはよい結果(合計得点 126 点、偏差値 66.0 点)が提示され、ネガティブ感情条件の被験者には悪い結果(合計得点 76 点、偏差値 34.0 点)が提示される。よい結果をフィードバックされた被験者はポジティブな感情を生起し、悪い結果をフィードバックされた被験者はネガティブな感情を生起するであろうと仮定された。

記憶検索課題 記憶検索課題は“一般的記憶傾向を調べる新しい検査をつくるための基礎的な資料とするものである”との教示のもとで行なわれた。被験者には、パソコンのモニターに提示されたターゲットを手がかりに身の回りで起こったできごとを思い出すように教示する。ただし、本実験では、再生された事柄を報告するのではなく、その再生事象がポジティブな内容のものか、ネガティブな内容のものかを被験者自身に判定させ、その感情的内容にしたがって、キーボード上のボタン(P ボタン/N ボタン)を押させた。それぞれの反応はポジティブ反応(P 反応)、ネガティブ反応(N 反応)と名付けられた。

ところで、従来の研究では、再生事象を言語的に報告させることが多い。しかし、本実験ではそのような方法を用いず、ボタン押しによって被験者の記憶検索を捉えようとした。その理由の 1 つは、日常的記憶の再生がきわめて自己提示的なものであり、防衛的なバイアスがかかる可能性が大きいからである。ボタン押しという方法を用いることによってこのようなバイアスを避けることができる。第 2 の理由は、言語的な再生それ自体が記憶

Table 2
Positive and negative responses and response positivity for each target

		Retrieval target					
		Self			Neutral words		
		Positive response	Negative response	Response positivity	Positive response	Negative response	Response positivity
Positive condition							
	<i>M</i>	2.83	1.94	0.89	3.00	2.17	0.83
	<i>SD</i>	1.82	1.26	2.25	1.82	1.65	2.28
Negative condition							
	<i>M</i>	1.79	2.89	−1.11	2.84	2.21	0.47
	<i>SD</i>	1.36	1.82	1.82	1.01	1.78	2.25

Note: Response positivity indicates a value of positive responses minus negative responses.

検索を妨害する情報処理負荷となる可能性があるからである。われわれが何らかの事象を思い出す時には、必ずしもそれを言語的に報告するわけではない。むしろ、何らかの事象が“頭を過る”ことが多い。そのような現象を捉えるためには、言語的な報告よりもボタン押しの方が有効であろうと思われる。

モニター上には、ターゲット語が1分間提示され、その間に被験者はできごとを思い出し次第ボタン押しを繰り返した。したがって、反応数は被験者ごとに異なっている。また、ボタン押しの際には反応時間(1/60秒)を測定した。

ターゲットは自己関係的な情報処理を促進させる単語として“自分”，そのような効果の期待できない単語(ニュートラル語)として“成績”，“仕事”，“努力”のうちのどれかの単語を提示した。これらのターゲット語は事前に行なった予備調査¹の結果をもとに、その感情的な意味がニュートラルな(ポジティブでも、ネガティブでもない)ものを選んだ。本実験では、2種類のターゲットの提示順、および、ニュートラル語は被験者ごとにランダムなものとした。

結 果

感情操作の妥当性 被験者の感情状態に関するチェックは、課題成績のフィードバックの直後と記憶検索課題の直後の2度行なわれた。ダミーの質問項目とともに感

¹ 実験で用いられた4語を含む20の抽象名詞を被験者(47名)に提示し、それぞれの単語の感情的意味(ポジティブ/ネガティブ)を7段階で評定させた。その結果、4語は比較的ニュートラルに近いものと評定された。評定の平均はそれぞれ、自分:4.383, 成績:3.809, 仕事:4.043, 努力:3.851であった。また、4語の間には感情的意味における差はなかった。

情状態をチェックする2項目(7段階評定)が含まれていた。これらの4項目とそれらに対する被験者の反応はTable 1に示す通りである。

感情条件ごとに各質問項目を分析した結果、フィードバック直後でも、記憶検索課題の直後でも、ポジティブ感情群はネガティブ感情群よりもよりポジティブな感情状態を報告しており、いずれの項目についても有意差が認められた。このようなことから、本実験での感情の操作は有効なものであったと考えることができる。

日常的記憶の検索 2種類のターゲットに対する被験者の反応をTable 2に示す。この結果に基づき、ポジティブ反応(P反応)数とネガティブ反応(N反応)数の差をもって、それぞれのターゲットに対する被験者の反応のポジティブさの得点(P得点)²を算出し(Table 2)、その得点について、感情条件(ポジティブ感情/ネガティブ感情)×ターゲット(自分/ニュートラル語)の分散分析(ターゲットは繰り返し要因)を行なった³。その結果、感情の主効果($F(1, 35)=4.28, p<.05$)、感情とター

² これ以外にも、ポジティブ反応に対するネガティブ反応の割合(反応の比)や理論的に仮定される反応率と実際の反応率とのずれなど、比率を用いた指標が考えられるが、これらの指標では、どちらかの反応が0の場合、他方の反応はデータに反映されないといった欠点がある。これに対し、P得点は反応の差の指標であるので、一方の反応が0の場合でも得点化が可能である。つまり、ポジティブ方向の歪みは正の値で、ネガティブ方向の歪みは負の値で示されるのである。また、P得点はその絶対値が歪みの大きさを表すので、記憶検索の指標として有効かつ妥当であると考えられる。

³ それ以前に、性差について検討したが、性差に関する主効果、交互作用は認められなかった。したがって、本研究では男女を込みにして結果を分析する。

Table 3
First response and response
latency for each target

Retrieval target	Positive response		Negative response	
	Self	Neutral words	Self	Neutral words
Positive condition				
<i>M</i>	2.31	1.91	2.20	2.43
<i>SD</i>	.63	.83	.84	.79
<i>N</i>	13	11	5	7
Negative condition				
<i>M</i>	1.82	2.00	1.75	1.78
<i>SD</i>	.87	.82	.89	.83
<i>N</i>	11	10	8	9

Note: Mean is coded score according to response latency.

グットの交互作用 ($F(1, 35)=4.18, p<.05$) が有意であった。ターゲットの主効果に関しては有意には至らなかったが、傾向差 ($F(1, 35)=3.68, p<.07$) が認められた。このような結果は、ポジティブ感情群ではポジティブな事象、ネガティブ感情群ではネガティブな事象の検索が促進されることを示すものであり、感情に一致した事象が検索されやすいというムード一致再生の効果を示すものである。

また、感情とターゲットの交互作用が有意であったので、ターゲットごとにポジティブ感情群とネガティブ感情群の P 得点を比較した。その結果、ターゲットが自分の場合には両群の間に有意差が認められた ($t(35)=2.97, p<.005$) が、ニュートラル語の場合には差は認められなかった ($t(35)=.29, ns$)。このことはムード一致再生効果が自己関係的な情報の処理を行なっている場合にのみ認められるという考えを支持するものである。

ただし、それぞれの感情群内でターゲットによる反応の P 得点について検討した結果、ネガティブ感情群では、ターゲットによって P 得点に大きな違いがあり、ニュートラル語に比べて自分をターゲットとした場合にネガティブな事象の検索が促進されることが認められた ($t(18)=2.78, p<.02$) が、ポジティブ感情群では、ターゲットによる反応の P 得点に差はなかった ($t(17)=.09, ns$)。

検索の潜時 ムード一致性モデルにしたがえば、感情は情報検索の潜時にも影響を及ぼすと考えられる (Craig & Tulving, 1975; Forgas & Bower, 1987)。現在の感情状態と一致した情報の検索は、一致しない情報の検索より、速く行なわれるであろう。

このことを検討するために、それぞれのターゲットに対する第 1 反応について、被験者のボタン押しの反応時間を分析した。反応時間は 60 分の 1 秒で測定されたが、ここでは、その分布に基づき、反応時間の速さにしたかつて被験者を 33% ずつ 3 群に分け、速い群を 1 点、中程度の群を 2 点、遅い群を 3 点としてコード化した⁴。その結果を Table 3 に示す。反応の種類 (P 反応 / N 反応) ごとに感情条件×ターゲット語の 2 元配置の分散分析を行なった結果、N 反応については感情の主効果の傾向が認められ ($F(1, 22)=4.18, p<.06$)、ネガティブ感情の時に、ポジティブ感情の時よりも反応が速く、感情と一致した情報の検索が速くなる傾向が見られた。一方、P 反応についても感情の主効果の傾向が認められた ($F(1, 30)=3.25, p<.09$) が、反応時間の平均は、ポジティブ感情群の方がネガティブ感情群よりも遅く、仮定された方向とは逆の結果であった。ターゲットの主効果、感情とターゲットの交互作用についてはどちらの反応の場合にも有意な結果は認められなかった。

考 察

“自分”ということばを手がかりとして記憶検索を行なった場合には、現在の感情に一致した感情的トーンを持つ情報の検索が促進された。一方、ニュートラル語を手がかりとした場合には、感情と一致した情報の検索が促進されることはなく、ムード一致再生効果は認められなかった。このような結果は、感情状態下で自己関係的な情報の処理を行なっている場合にのみ、ムード一致再生効果が認められることを示している。

従来、このような結果は慢性的な抑鬱傾向を持つ(慢性的にネガティブ感情を経験している)人々を被験者として報告されたものであった (Pyszczynski, Hamilton, Herring, & Greenberg, 1989; Kuiper & Derry, 1982) が、本研究は実験的に生じられた感情の場合でも同様の効果が認められることを示した。その意味で、本研究は感情が記憶に及ぼす効果をより一般的な形で示したものである。

⁴ ターゲットごとに記憶検索の潜時(反応時間)の分布をとり、それぞれを上・中・下 33% ずつ 3 群に分けた。60 分の 1 秒単位に換算した反応時間は、“自分”というターゲットで 187—1872 (単位は 1/60 秒) の範囲に、ニュートラル語で 168—1900 の範囲にわたっている。ターゲットごとに反応時間を 3 群に分けると、ターゲットが“自分”の場合、187—347 は速い群、348—606 は中程度、607—1872 が遅い群となる。同様に、ニュートラル語の場合には、168—331、332—413、414—1900 がそれぞれ速い、中程度、遅い群となる。反応時間はそれぞれのターゲットについて、速い群を 1 点、中程度を 2 点、遅い群を 3 点とコード化して分析した。

ただし、ムード一致再生効果が明確な形で示されたのは、ネガティブ感情群においてのみであった。ポジティブ感情群においては、自己関係的な情報処理の影響は明確な形で示されなかった。むしろ、ポジティブ感情群の結果は感情が記憶検索を自動的に促進するというムード一致性効果の本来のモデルに一致するものであると思われる。

ネガティブ感情が自己関係的な情報の処理を促進する可能性については Weiner (1986) も指摘している。本研究の結果はそのような指摘と一致するだけでなく、従来、ムード一致性モデルの問題点として指摘されてきた感情の効果の非対称性についても示唆を与えるものである。本実験の結果から考えられることは、ポジティブ感情が比較的自動的、直接的に認知過程に影響するのに対し、ネガティブ感情は自己関係的な情報の処理を媒介として認知過程に影響する可能性があるということである。すなわち、感情が自己関係的な情報の処理を媒介して記憶の検索に影響するという考えも、自動的に記憶検索過程を促進するという考えも、ともに正しいものであり、前者はネガティブ感情に特有のプロセス、後者はポジティブ感情に特有のプロセスと考えることができる。

反応時間については、ムード一致性モデルにしたがい、感情と一致した反応(検索)はその潜時が短いと仮定されたが、この仮定はネガティブ感情にのみ当てはまり、ポジティブ感情には当てはまらなかった。このような結果が感情の効果のどのような側面と関連しているのかは明確ではないが、ターゲットの主効果、感情とターゲットの交互作用については有意な結果が得られていないことから、この結果は感情の非対称性とは無関係のものと考えられる。

ところで、前述の Schwarz & Clore (1988) は、抽象的であまいな事象の評価・判断の際には感情がヒューリスティックスとして働き、評価・判断が感情状態の方向に歪められるとしている。本実験は、この Schwarz & Clore の考えと Forgas や Bower の感情が記憶検索過程に働く結果として評価過程が歪められるとする考えとの比較検討を直接意図したものではないが、感情による歪みはターゲット語が自己関係的である場合にしか認められなかったことから考えると、仮に被験者が検索された事象の感情的な評価・判断を行っていたとしても、その過程は自己関係的な情報処理によって大きく影響されるものであると推測することができる。

引用文献

- Anderson, J. R. 1983 *The architecture of cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- Bartlett, J. C., Burleson, G., & Santrock, J. W. 1982 Emotional mood and memory in young children. *Journal of Experimental Child Psychology*, **34**, 59-76.
- Blaney, P. H. 1986 Affect and memory; A review. *Psychological Bulletin*, **99**, 229-246.
- Bower, G. H. 1981 Mood and memory. *American Psychologist*, **36**, 129-148.
- Clark, M. S., & Isen, A. M. 1982 Toward understanding the relationship between feeling states and social behavior. In A. H. Hastorf & A. M. Isen (Eds.), *Cognitive social psychology*. Amsterdam: Elsevier / North-Holland. Pp. 73-108.
- Craik, F. I. M., & Tulving, E. 1975 Depth of processing and retention of words in episodic memory. *Journal of Experimental Psychology: General*, **104**, 268-294.
- Fiske, S. T., & Taylor, S. E. 1984 Affect. In S. T. Fiske & S. E. Taylor (Eds.), *Social cognition*. California: Addison-Wesley. Pp. 310-339.
- Forgas, J. P., & Bower, G. H. 1987 Mood effects on person-perception judgements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **5**, 53-60.
- Forgas, J. P., Burnham, D. K., & Trimboli, C. 1988 Mood, memory, and social judgements in children. *Journal of Personality and Social Psychology*, **54**, 697-703.
- Forgas, J. P., & Maylon, S. 1987 After the movies: Transient mood and social judgement. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **13**, 467-477.
- Isen, A. M. 1984 Toward understanding the role of affect in cognition. In R. S. Wyer & T. K. Srull (Eds.), *Handbook of social cognition*. Vol. 3. Hillsdale, N. J.: Erlbaum. Pp. 179-236.
- Isen, A. M., Shalke, T. E., Clark, M., & Karp, L. 1978 Affect, accessibility of material in memory, and behavior; A cognitive loop? *Journal of Personality and Social Psychology*, **36**, 1-12.
- 川瀬隆千 1990 感情が記憶に及ぼす影響: 研究のレビューと今後の展望 立教大学心理学科研究年報, **32**, 28-42.
- Kuiper, N. A., & Derry, P. A. 1982 Depressed and nondepressed content self-reference in mild depressives. *Journal of Personality*, **50**, 67-79.
- Leight, K. A., & Ellis, H. C. 1981 Emotional mood states, strategies, and self-dependency in memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **20**, 251-275.
- Medigan, R. J., & Bollenbach, A. K. 1982 Effects of induced mood on retrieval of personal episodic and semantic memory. *Psychological Reports*, **50**, 147-157.
- Nasby, W., & Yando, R. 1982 Selective encoding and retrieval of affectivity valent information: Two cognitive consequences of children's mood states. *Journal of Personality and Social Psychology*, **43**, 1224-1253.

- Natale, M., & Hantas, M. 1982 Effect of temporary mood states on selective memory about self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **42**, 927-934.
- Pyyszczynski, T., Hamilton, J. C., Herring, F. H., & Greenberg, J. 1989 Depression, self-focused attention, and negative memory bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 351-357.
- Schwarz, N., & Clore, G. L. 1988 How do I feel about it? The informative function of affective states. In K. Fiedler & J. Forgas (Eds.), *Affect, cognition, and social behavior*. N.Y.: Hogrefe Inc. Pp. 44-62.
- Snyder, M., & White, P. 1982 Mood and memory; Elation, depression, and remembering the events of one's life. *Journal of Personality*, **50**, 149-167.
- Teasdale, J. D., & Fogarty, S. J. 1979 Differential effects induced mood on retrieval of pleasant and unpleasant events from episodic memory. *Journal of Abnormal Psychology*, **88**, 248-257.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. N.Y.: Springer-Verlag.
- 1991. 1. 8. 受稿, 1991. 11. 9. 受理——